

# 反転語「階段」「段階」の成立と定着について

樊 怡君

## 1. はじめに

現代日本語には、「階段」と「段階」のように、字音形態素が同じで、字順が相反する漢語語彙（以下、「反転語」とする）が少なくない。反転語には、漢籍が中国から日本へ伝来するとともに、言葉も伝わり、日本語に定着したものがある。一方で、日本で造語され、それが中国に伝わって、定着したものもある。本稿では、反転語「階段」「段階」の成立と定着について見ていく（「階段」については、主に樊 2021（予定）による）。

## 2. 「階段」「段階」の成立

### 2. 1 「階段」について

『日本国語大辞典』第二版（以下『日国』と略す）といくつのデータベースを調べたところ、日本の古典と漢籍においては、『階段』は江戸後期まで現れず、この語は、江戸後期に日本で造語されたものと思われる（『紙上蜃気』（1758）<sup>(1)</sup>が初出）。そこで、まずそれまでの日本語では、どんな言葉で「階段」の意味を表したのかを調査し、「階段」の成立過程を考察していきたい（詳しくは、樊 2021（予定）参照）。

まず、『日国』における「階段」の語釈を調べてみた。これを見ると、意味（1）

高さの異なる床面を連絡する段々の通路。斜めに渡した鰯桁（ささらげた）と水平の踏み板からなる。種類には、直通階段、折れ階段、回り階段、螺旋階段などがある。

が「階段」のもとの意味であり、具体的な物を指している。それに対して、意味（2）

物事が順を追って進展していく過程の一区切り。等級。段階。

は、意味（1）に基づいて、抽象化されたものである。本稿では、主として、「階段」の意味（1）、つまり、「階段」の物理的な意味を考察することにする。

また、『日国』では、「階段」の「語誌」で、次のように述べている。

漢籍には見られず、おそらく江戸後期に日本で造語されたものと思われる。それまでは和語で、平安時代は「きざはし」といい、室町になって「きだはし」が現

われて併用された。江戸時代は「はしご」が多用されたが、「だんばしご」という語も現われ、明治時代になってから「はしごだん」ともいうようになった。

ここから、「階段」が成立する前に、「きざはし」「きだはし」「はしご」「だんばしご」が、成立した後に「はしごだん」が使われたことが知られる。これらの語を『日国』で調べると、まず、「きざはし」という語は、『字津保物語』に見られる。「きざはし」は、平安時代に一般的な語であり、「階」（『和玉篇』・『和漢音釈書言字考 合類大節用集』・『和英語林集成』（再版）・『言海』）、「陞」（『和玉篇』）、「城・段橋」（『和漢音釈 書言字考 合類大節用集』）と表記されてきた。漢籍では、「階」は、『礼記』（喪大記）の注に「梯也，簣虞之類」とあり、はしごの意を示す。また、王粲の「登楼賦」の「循階除而下降兮，気交憤於胸臆」、何遜の「七召」の「九層鬱律以階梯」にある「階除」「階梯」は「登る階段・はしご段」の意味である。ここから、日本語の「きざはし」は、中国語の「階」と同じ意味で、「階」という漢字を借用し、「きざはし」を表記したと考えられる。

「きだはし」については、『和玉篇』・『文明本節用集』・『天正本節用集』・『饅頭屋本節用集』・『易林節用集』などの古辞書類に見られる（『日国』）。その表記は、『日国』によると、『和玉篇』では「陟・陟」、『文明本節用集』では「階・陞」、『天正本節用集』では「階」、『饅頭屋本節用集』では「階」、『易林節用集』では「階」である。『日国』の用例から、室町時代になって、「きだはし」が現れて、「きざはし」と併用されたことが知られる。

『日国』で「はしご」「だんばしご」「はしごだん」を調べると、この三つの語は、「階段」が生まれる前後に、広く使われたことがわかる。江戸時代には、まず「はしご」が出現して多用されたが、その後、「はしご」と区別するためか、「だん」をつけた「だんばしご」という語も現われ、「はしご」と併用された。明治時代になってからは、「はしごだん」ともいうようになった。

また、漢字表記については、『日国』にあるもの以外に、「段階子」「檀梯子」「壇階子」「階子段」「楼梯」のような他の漢字表記も見つかった。つまり、「はしご」「だんばしご」の漢字表記では、「梯（子）」と「階子」、「段」と「壇」「檀」がそれぞれ互いに入れかえ可能になっている。

「階段」の成立過程における各語の表記と出現年代を以下の表にまとめる。

表1 「階段」の成立までの各語の表記と出現年代

語彙	漢字表記	出現の時代
きざはし	階・陞・城・段橋	平安時代
きだはし	階・陟・陟・陞・階	室町時代
はしご	梯子・階子	江戸時代
だんばしご	段梯子・段階子・檀梯子・壇階子	江戸時代

こう見ると、「階」と「段」の二つの漢字を組み合わせ、「階段」という二字漢語をつくり、「はしご」「だんばしご」の意味を表したといえそうである。

## 2. 2 「段階」について

まず「段階」の意味・用法をおおざっぱに把握するために、『日国』における「段階」の語釈を見てみよう（下線は筆者による。以下同じ）。

### 【段階】

〔名〕

(1) だんばしご。きざはし。階段。

(2) ある基準によって分けられた順序。等級。

＊文明論之概略〔1875〕〈福沢諭吉〉五・九「此段階を存するも交際に妨ある可らずと雖ども」

(3) 物事の進行・発展に応じた区切り。局面。

＊嚙氷冷語〔1899〕〈内田魯庵〉「癮ては他の新聞が五万に達し他の小説が一万に届かんとする段楷（ダンカイ）として見るを得」

＊幸木〔1948〕〈半田良平〉昭和一八年「わが病癒えてきたれる段階をかへりみるだに遠き思ひす」

『日国』によると、「段階」は、『文明論之概略』<sup>②</sup>に、「ある基準によって分けられた順序。等級。」の意味で、初めて出現している。



図1 『文明論之概略』初版の表紙

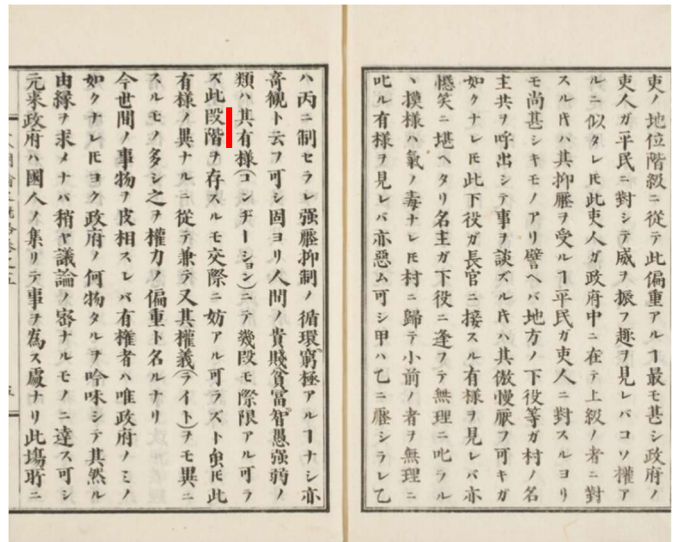


図2 『文明論之概略』における「段階」

(「ウィキペディア」<https://ja.wikipedia.org/wiki/文明論之概略>)

(「慶応義塾大学メディアセンター」

<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a23/81>)



この「三段ノ階」の「段」は助数詞、「階」は名詞として使われているが、この「…段の階」が略されて、「段階」となった可能性もあると考えられる。

さらに、「段階」は、文化5年(1808)に成立した『犬追物御覧記／他五編』の子書『信玄公被相定高名段階之次第』の書名でも使われている。今回調べた限りでは、この書名中の「段階」が、「段階」が抽象的な意味で使われたと思われるもっとも古い例である。

### 3. 「階段」「段階」の定着

本節では、「階段」「段階」が造語されてから後の、日本語における定着を解明していきたい。前述のとおり、「階」「段」には、種々の読み方があり、特に「階段」という漢字表記は必ずしも「カイダン」と発音するわけではないので、ここでは、振り仮名として「かいだん(カイダン)」「だんかい(ダンカイ)」がついている語例のみ取り上げて、考察対象とする。

#### 3. 1 近代辞書における「段階」

ここでは、近代の国語辞典の収録状況を調べて、その調査結果から、「段階」の定着状況を明らかにしたい。(「階段」については、樊 2021(予定) 参照)

明治大正期の代表的な国語辞書で「だんかい」を調べ、見出し語に「段階」という漢字表記があるか、ある場合には語釈はどうなっているかを、表2にまとめた。

表2 近代国語辞書における「段階」の語釈

辞書名	出版年	編著者	語釈
『言海』	1891	大槻文彦	×
『日本大辞書』	1893	山田美妙	×
『ことばの泉』	1898	落合直文	(名) だん。しな。階級。
『辞林』	1907	金沢庄三郎	(名) 一、きだ。きだはし。二、しな。くらい。三、順序。等次。
『大日本国語辞典』	1915	上田万年 松井簡治	(名) 一、だんばしこ。きだはし。だん。きだ。階段。二、しな。くらいの差。三、順序。等級。階級。
『大辞典』	1912	山田美妙	(名) 階段と同じ語。
『言泉：日本大辞典』	1922	落合直文 芳賀矢一	(名) 一、かいだん(階段)に同じ。二、(地) だんきう(段丘)に同じ。

×は未収録。

表2を見ると、「段階」は、『言海』と『日本大辞書』にはまだ収録されておらず、『ことばの泉』にはじめて見出し語として収録されたことがわかる。その後の国語辞

書には、ほぼ立項がある上に、『ことばの泉』『辞林』『大日本国語辞典』には、「しな」「等級」のような抽象的な意味も載っているが、『大辞典』『言泉：日本大辞典』<sup>(4)</sup>では、「階段」の同義語として扱っている。近代国語辞書における「段階」の収録状況によって、「段階」は、「階段」と同じく、明治後期から、しだいに定着していったことが推測される。

### 3. 2 「日本語歴史コーパス」における「階段」「段階」

国立国語研究所が開発した「日本語歴史コーパス」で、「階段」と「段階」を調べてみた。「階段」「段階」をそれぞれ入力して検索したところ、「階段」は184件出現し、そのうち、振り仮名のついているものが127例あった。一方、「段階」は25件出現し、そのうち、振り仮名のついているものが10例あった。それぞれの検索結果によって、出現した振り仮名とそれぞれの語例数を以下の表3に示す。

表3 「階段」「段階」の振り仮名及びそれらの語例数

漢字表記	振り仮名	語例数（時代別内訳）
階段	はしご	4（明治：3、大正：1）
	かいだん	112（明治：21、大正：91）
	はしごだん	11（明治：0、大正：11）
段階	だんかい	9（明治：7、大正：2）*
	だんばし（子）	1（明治：1、大正：0）

\*「だんくわい」1例（明治の例）を含む。

上の表を見ると、「日本語歴史コーパス」に収録された近代の作品では、漢字表記「階段」の読み方には、「はしご」、「かいだん」、「はしごだん」があり、「段階」の読み方には、「だんかい」と「だんばし（子）」がある。

「階段」については、「かいだん」が、近代文学作品では最も多く使われて、このころに定着するようになったと推測される。「はしご」で読まれるものは、近代の文学作品ではかなり少なく、だんだん消滅していったことが推測される。「はしごだん」は明治時代に出現したが、大正になって、文学作品でよく使われているようである。また、語例の意味をそれぞれ確認したところ、やはり「高さの異なる床面を連絡する段々の通路」の本義で使われる語例が圧倒的に多いことが分かった（以上、樊2021（予定）による）。

「段階」（振り仮名「だんかい」、または「ダンカイ」が付いているもの）については、用例を挙げる。

(1) は、「日本語歴史コーパス」に収録された「<sup>だんかい</sup>段階」の最初の例である。

- (1) 卒業と云へる惠福の彌や増したるは、即ち責任の一層殖えたることに  
て、諸君は新たに一段階<sup>だんかい</sup>に登られたるものなれば、今日の卒業は取も直さ  
ず、一種の始業と存ぜらる。

(「卒業は始業なり」『女学雑誌』1894)

- (2) は、「だんばし(子)」と読まれる例である。

- (2) …暫くしてお蓮立舉り、段階子<sup>だんばし</sup>蹈で昇りゆきしが、其まま七段目に立止ま  
りて、窃上をさし覗く、誰歟忍ぶ人ありての事歟、やがて何故歟莞爾とし  
て降來り…

(嵯峨の屋おむろ「浮世新聞」『太陽』1895)

これは、「段階<sup>だんばし</sup>」の後ろに「子」が付いているので、「段階子(だんばしご)」と  
読まれたと考えられる。

「日本語歴史コーパス」の検索で現れた「段階」の語例は、「段階子<sup>だんばし</sup>」を除き、す  
べて「等級、区切り」という抽象的な意味で使われている。つまり、この時代に、「段  
階<sup>かい</sup>」は、すでに「等級、区切り」という意味で定着していたことがうかがえる。

### 3. 3 新聞記事における「段階」

本項では、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」(「明治・大正・昭  
和」)と「朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』」(「明治・大正」)を  
利用して、近代の新聞における用例を見ていく。ところで、これらのデータベースで  
は、「階段」「段階」で検索して、検索結果の見出しに「階段」「段階」があっても、  
記事本文には、「階段」「段階」ではなく、ほかの語(漢字表記)が使われている場  
合が多い。例えば、「階段」の検索結果に現れた記事本文に、「階子」「梯子段」「階  
子段」「段階」「楷段」が使用されているということがある。そこで、ここでは、記  
事本文を確認して、「かいだん(カイダン)」「だんかい(ダンカイ)」という振り  
仮名がついている語例のみを抽出して、調査を行う。

「階段」については、読売新聞では、1892年(明治25年)の記事に、はじめて「階<sup>かい</sup>  
だん<sup>だん</sup>」が現れ、その後、使用がしだいに増え、昭和に至って、「階子」などがあまり使  
われなくなり、「階段<sup>かいだん</sup>」として定着していく。また、朝日新聞では、1883年の記事に  
「階段<sup>かいだん</sup>」が見られる。これは、読売新聞より早い。意味・用法としては、「(発展過

程の) 段階、一区切り」という抽象的な意味で使われるものもあるが、「段になった昇降用の通路」という物理的な意味で使われるものの方が多い(以上、樊 2021 (予定) による)。

一方、「<sup>だんかい</sup>段階」については、読売新聞では、1891 年(明治 24 年) 4 月 24 日の記事に、はじめて現れる。

- (3) …此事たる元来備荒儲蓄法及び埼玉県なる同法施行規則に違背し濫に<sup>だんかい</sup>段階と立つるのみならず…

(「埼玉県水害地人民の不满」 1891 年 4 月 20 日 朝刊)

読売新聞では、「<sup>だんかい</sup>段階」の用例は 5 例(明治 3 例、大正 2 例)しか見つからなかった。用法としては、ほとんど名詞として、「等級、区切り」という抽象的な意味で使われているが、次の例のように、「段になった昇降用の通路」という物理的な意味で使用されるものも見つかった。

- (4) …従前は<sup>だんかい</sup>段階の設けありて何時にても自由に通行し得たるに此程是を撤去したれば…横浜市会に於て三番議員戸塚千太郎氏は<sup>だんかい</sup>段階再設の儀を鐵道局に掛合はんとの説を提出し…

(「横浜市会と鐵道局」 1891 年 5 月 22 日 朝刊)

朝日新聞では、検索結果に現れた記事の見出しに「段階」があっても、記事本文を見ると、「段階」ではなく、「段階」「段階子」「階段」などの語(漢字表記)が使われていることが多い。朝日新聞における「<sup>だんかい</sup>段階」の語例数は、明治期 1 例、大正期 9 例で、読売新聞の語例数より少し多い。最初の用例は、次のものである。

- (5) 河岸の台地は學術語にて河成(かせい) <sup>だんかい</sup>段階と稱すれども俗語無きが如し、蝦(えぞ)にては之をニナラと曰ふ。

(「河の話(上)」 1906 年 1 月 1 日 朝刊)

朝日新聞における「<sup>だんかい</sup>段階」の使用は読売新聞より遅いが、用法は現代語の用法と同様に、抽象的な意味で使われている。



#### 4. 終わりに

本稿は、反転語「階段」「段階」が日本で成立し、定着してきた過程について、調査・考察してきた。

「階段」は、1758年の建築学辞書『紙上屋気』に、はじめて出現した。「段階」については、室町時代と江戸時代初期の用例が見つかったので、「階段」に先行する語であると思われる。「段階」という語の成立については、「…段の階」が略されて、「段階」となった可能性が考えられる。

「階段」「段階」の定着については、両者ともに、確実に定着したのは19世紀の終わり頃だと思われる。「階段」は、1883年の新聞記事、1890年ごろの雑誌で確認でき、1898年頃から国語辞書に収録され始めるようになった。意味・用法については、「のぼり下りのための通路」という物理的な意味（本義）で多用されている。

「段階」は、1891年の新聞記事、1894年の雑誌から確認でき、辞書では、1898年の『ことばの泉』に初めて収録されている。こちらは、主に「区切り、等級」という抽象的な意味で使用されている。

今後の研究課題としては、日中語彙交流史の観点から、「階段」のみが中国語に定着したのはなぜなのか、「階段」はいかにして中国に流入したのか、中国語における「階段」は日本語と違って、抽象的な意味で使われているのはなぜなのかについて解明したいと考える。また、本稿における調査についても、さらに調査資料を増やし、研究の内容を充実させていきたいと思う。

#### 【注】

- (1) 『紙上屋気』は、日本最初の建築辞書で、35部に及ぶ意義分類部（神宮之部・鳥居之部など）と42部のイロハの部（居之部・呂之部など）からなる。これは、辞書とはいえ、約2300語の単語が羅列されているのみである。宝暦7年（1757年）に本書の草稿といえる『木匠言語』が書かれ、翌年の宝暦8年（1758年）の写本が最初期のものである。本書はさらに後の寛政2年（1790年）に増補され、公刊された。（早稲田大学中谷礼仁建築史研究室に公開されている「大工書データ」による）
- (2) 『文明論之概略』は、福沢の著書中、最も学問的体裁の整った著書で、西洋文明の大要を記して、この文明に向かって進むことが日本の独立を全うする道であることを説いたものである。初版は、1875年（明治8年）8月20日に刊行され、全6巻10章より成る。1877年刊行の田口卯吉『日本開化小史』と共に、文明開化期の在野史学における代表的な著作とされる。（「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」と「ウィキペディア」による）
- (3) 『群書類従』は、塙保己一が編纂した国学・国史を主とする一大叢書であり、古代から江戸時代初期までに成った史書や文学作品、計1273種を収めている。寛政5年（1793年）～文政2年（1819年）に木版で刊行され、歴史学・国学・国文学等の学術的な研究に、多大な貢献をしている。『続々群書類従』は、明治40年前後に国書刊行会から刊行され、正統『群書類従』に漏れた古典・古記録や江戸期に述作編纂された古典研究資料等を収録したものである。（「ウィキペディア」による）

- (4) 国語辞書。落合直文編『ことばの泉』を、芳賀矢一が増補、改訂したもの。大正10年～昭和4年（1921～1929）刊。百科語彙を多く収める。（「デジタル大辞泉」による）

#### 【参考辞書】

『言海』 大槻文彦 1889～1891  
『言泉：日本大辞典』 落合直文・芳賀矢一 大倉書店 1928  
『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』 佐藤亨 明治書院 2007  
『ことばの泉』 落合直文 大倉書店 1898  
『辞林』 金沢庄三郎 三省堂 1907  
『大辞典』 山田美妙 嵩山堂 1912  
『大日本国語辞典』 上田万年 松井簡治 金港堂書籍 1919  
『日本国語大辞典』（第二版） 日本大辞典刊行会編 小学館 2000～2002  
『日本大辞書』 山田美妙（武太郎） 日本大辞書発行所 1893

#### 【参考文献】

荒川清秀（2000）「「健康」の語源をめぐって」『文学・語学』第166号 全国大学国語国文学会  
佐藤亨（2013）『現代に生きる日本語漢語の成立と展開』明治書院  
鄒文君（2016）「反転語「素因」・「因素」について」『立教大学大学院日本文学論叢』巻16 立  
教大学大学院文学研究科日本文学専攻  
樊怡君（2021（予定））「近代語「階段」の成立と定着」『言語教育研究』第21号 拓殖大学言語  
教育研究科

#### 【参考データベース】（いずれも最終閲覧日は、2020年12月14日）

「朝日新聞記事データベース」（聞蔵Ⅱビジュアル） 朝日新聞社  
<https://database.asahi.com/index.shtml>  
「古典籍総合データベース」 早稲田大学 <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>  
「ジャパンナレッジ」 ジャパンナレッジ <https://japanknowledge.com>  
「新日本古典籍総合データベース」 国文学研究資料館 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/>  
「東京大学資料編纂所データベース」 東京大学 <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>  
「日本語歴史コーパス」（中納言2.5.2 データバージョン2020.03） 国立国語研究所  
[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/)  
「ヨミダス歴史館」 読売新聞社 <https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>